



→杉とこすれて付いた傷や伐採部分を保護していく。高さ20メートル付近の危険な作業、中央が宇佐美さん。



↑福智山登山口に積み上げた土壌改良材を会員一人ひとりが運ぶ。土壌の改良は現在も年間を通じ行われている。

→根を圧迫していた岩を砕く。その硬さにドリルの先が何本も折れ、ようやく取り除くことができた。

←平成16年ごろから治療の成果が出てきた虎尾桜。世話人会が設置した支柱に力強く支えられ、満開の花を咲き誇る。



# 蘇る霊木

よみがえり

回生

木が本来持っている生命力を引き出す。  
根本的な治療により、巨桜は息吹を宿します。  
やがて人々が愛し、仰ぎ見る名桜となりました。



## 「隔年」から「毎年」への回復

平成十三年二月、真冬の福智山で本格的な治療が始まりました。KBC「水と緑のキャンベーン」の重要樹木救済治療の助成認定を受け、世話人会の会員は虎尾桜の行く末を樹木医・宇佐美陽一さんの手腕に託します。その治療方針は会員たちを驚かせるものでした。

まず始めたのは、以前理めたウレタンをはがすことでした。密封せず、木を自然の姿に戻そうというものでした。そして、根を圧迫していた硬い岩を粉砕。さらに、葉のついた大きな枝も枯れていれば容赦なく切り落としました。

「大枝を切って大丈夫かなと思いましたが、宇佐美さんを信用していました。荒治療でも虎尾桜がよみがえるなら、これでいいのだと見守りました」と会員のみなさんは振り返ります。

宇佐美さんが特に力を入れたのが土壌の改良でした。その治療は今も続いています。一袋二十kgもある土壌改良材を会

## 名実ともに日本の名桜

会員は保護活動を進めるかわら、虎尾桜のすばらしさをみんなに知ってもらおうと、PR活動も積極的に進めました。まず、伐採した杉を活用して案内板やベンチを作成。やぶを切り開いて山道も整備しました。平成六年以降、開花時には「桜ウォーク・自然観察会」を毎年開催。久原弘さんが書き下ろした桜マップも配布しました。会員の活動はマスコミからも取材されるようになり、虎尾桜は注目を集めます。世話人会は平成五年に「さくら功労者・功労賞」（日本さくらの会）の全国表彰を受け、平成十三年にはKBC水と緑の大賞・特別賞（九州朝日放送）その翌年に「筑豊賞」（読売新聞社）を受賞。虎尾桜も平成12年に町の文化財に指定され、日本さくらの会が選定した「名木・日本の桜」の五十五本に名を連ねるほど有名になりました。

## もう一つの桜物語



## 福泉坊の墓守の桜

修験道座主の屋敷跡である福泉坊。上野焼の皿山本繁跡に沿って福智中宮神社参道を登り、鳥居手前から右に入った場所にある。その福泉坊の一面に、福智開山の釈教順法師の墓をはじめとする古墓がまつられ、鷹取城戦死者を慰霊する五重の石塔がある。「墓守の桜」は、これらを守るようにひっそりと立っている。虎尾桜と同じエドヒガンで、その濃色の花は霊を慰めようと可憐に咲く、乙女のようにも感じられる。

→現在行っている呼び接ぎの治療、幹のそばに植えた二本のエドヒガンを融合させ、養分を行き渡らせる。



↑虎尾桜と源平桜の説明看板を作成。→虎尾桜などの案内板もおおよそ20か所に設置した。伐採した杉を使い、すべて会員の手づくり。



員一人ひとりが担ぎ、急な山道を登ります。土壌を改良することは、木自身が本来持っている生命力を引き出すことでした。すぐに結果が出ない地道な治療です。「木は自分で自分を治す力を持っています。治す力を引き出すことは、木そのものを元気にしてやることです。根つこの部分、土の中の部分が肝心な部分」と宇佐美さん。治療を始めて数年後、切り株から新しい枝が生えてきました。虎尾桜が本来の力を取り戻し、回復の兆しを見せはじめたのです。

そして平成十六年の春、治療の成果がようやく出てきました。花の数がかつてないほど増えてきたのです。それまで、老木で大樹の虎尾桜は、偶数年の二年に一度しか満開にならない木でした。しかし、この年以來毎年、満開の花を咲き誇るようになったのです。



↑治療を始めた平成13年2月18日、雪が残る寒さの中で作業が行われた。